

基盤は福岡。ここからアジア各国はじめ、国際コミュニケーションの世界を広げたい。
翻訳業大手、アラヤ（東京・目黒）は2009年1月に福岡支社を開設。「IT、家電などの輸出型企業を中心顧客に据えて、事業基盤を固めている」（中嶋重富社長）。

例えば、中国や韓国に液晶テレビを送り込む際、それらの国の言葉で書かれた「取扱説明書」が必要になるが、これなどアラヤが得意とする分野。世界50カ国で、400人超の翻訳家と業務提携しながら45以上の言語を駆使して対応する。同社はすでにドイツ（デュッセルドルフ）から中国（大連・香港）にも拠点を持っており、国内拠点は大阪に次いで3社目。

同社が設立5年で急成長を遂げてきた理由は中嶋社長の著書『56歳での起業。』（トランスワールドジャパン）に詳しいが、都市銀行、中堅翻訳会社を経て、中高年で独立できた背景には「結果を信じて足だけは止めない」（同書より）姿勢が一貫していた。

また「事務所には驚きがあります」とも記す通り、福岡支社もギャラリーかと思いがうばかりに、白を基調にした幅広い室内には絵画やポスターが掲げられている（デザイン担当

は画家、笹尾光彦氏）。社員の家族も事務所に招待するほか、「ドイツ語マイスター」「みどりの編集者」など、社員の肩書もユニーク。「創造性豊かなビジネスを貫く」姿勢の反映であり、福岡支社ではこれから業務拡大に伴い、中途採用も進めていく方向にある。（写真は中嶋重富・アラヤ社長と同社の事務所内）

